

幼稚園の外遊びの実態と幼稚園教諭の外遊びの意識

Survey of outdoor play in kindergarten and
Kindergarten teacher's thoughts on outdoor play

赤木敏之*

Abstract

This study attempted the survey of outdoor play in kindergarten and kindergarten teacher's thoughts on outdoor play.

The purpose of this study was to understand the survey of outdoor play in kindergarten and kindergarten teacher's thoughts on outdoor play. A questionnaire survey was performed. The results are summarized as follows:

- (1) Most kindergarten teachers think that outdoor play is important for fitness and performance, exciting the senses, opening feelings, acquiring sociability. But outdoor playtime was uneven both during the day and throughout the week.
- (2) The types of outdoor play changed and remained the same over the years and generations.
- (3) A statistical significance was recognized between awareness of the importance of curriculum and outdoor playtime.
- (4) The results suggested that the kindergarten teacher's knowledge of fundamental movement and basic moving ability, the effect of ultraviolet rays and other environmental factors were insufficient.

キーワード：外遊び、外遊びの実態、幼稚園教諭の意識

I. 問題

幼稚園での外遊びを考える場合、幼稚園カリキュラムのガイドラインである幼稚園教育要領をおさえておかなければならない。文部科学省は、2008（平成20）年3月28日に幼稚園教育要領の改訂を行い、2009（平成21）年度から実施している。今回の改訂は、生きる力の基礎を育成すること、豊かな心と健やかな体を育成することを基本的なねらいとしている（文部科学省、2008）。幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領をガイドラインにし、創意工夫し、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成、実施していくことが必要である。

幼稚園教育要領のねらい、内容のもとに各幼稚園で教育課程、カリキュラムが編成され保育が展開されているのであれば、幼児の健やかな「からだ」は育つと考えられる。

しかし、全国的な視野で見ると現実はそうではない。全国的にも子どもの体力の低下、運動能力の低下が言われ、これ以上、下がりようがない危機的な水準であると指摘している。その原因は、子どもを取り巻く社会環境の変化（生活が便利になり、日常的に体を動かすことが減少。外での遊びに必要な時間、空間、仲間の減少等）、保護者の意識の変化、生活習慣の乱れ等があげられている（「平成17年度体力・運動能力調査結果」文部科学省、2006）。

原因の一つとして子どもを取り巻く社会環境の変化があげられているが、社会環境として幼稚園は変化しているのであろうか。幼稚園においては外で遊ぶ空間があり、遊ぶ仲間はある。では、幼稚園に通っている子どもたちは、体を動かしているのだろうか。どのような遊びをしているのであろうか。時間的にはどのくらい遊んでいるのであろうか。また、原因のひとつとして、保護者の意識の変化が挙げられているが、幼稚園教諭の外遊びに対する意識や幼稚園における外遊びの実態を把握しておく必要

* Toshiyuki AKAGI 関西学院聖和幼稚園 副園長 修士（教育学）

があると考え。

II. 目的

本研究では、幼稚園の外遊びの実態、幼稚園教諭の外遊びの意識を把握することが目的である。

III. 方法

幼稚園の外遊びの実態、幼稚園教諭の外遊びに関する意識をまず把握することが重要と考え、外遊びに関する質問紙を作成し、質問紙調査を実施した。

1. 対象

対象は、京都府、大阪府、兵庫県、広島県の私立幼稚園10園の幼稚園教諭100名である。

2. 手続き

- (1) 調査期間：2009年5月から6月
- (2) 調査手順：質問紙の配布および回答用紙の回収は、各幼稚園の園長を通じて行った。回答にあたっては無記名で、回答の得られた92票（回収率92.0%）を分析の対象とした。
- (3) 調査項目とその内容：教諭の役職・担当クラスといった基本属性、1週間のうちの外遊びの日数、1日の外遊びの時間、外遊びの内容、保育における外遊びの重要度、保育内容の重要度の順位等、幼稚園の外遊びの実態と保育者の意識に関する内容である。
- (4) 分析方法：幼稚園の外遊びの実態、幼稚園教諭の外遊びに関する意識を把握するために、度数分布と記述統計で、その特徴を検討した。さらに、外遊びの実態と幼稚園教諭の意識の関連性についても検討を加えた。1週間のうちの外遊びの日数、1日の外遊びの時間に関しては、学年別に集計し、それ以外の項目は、対象92票のデータを一括して統計処理を行った。
- 外遊びの時間の検定に関しては、30分未満を1点、30分～1時間未満を2点、1時間～1時間30分未満を3点、1時間30分～2時間未満を4点、2時間～2時間30分未満を5点、2時間30分～3時間未満を6点、3時間以上を7点と点数化し統計処理を行った。
- (5) 統計処理：PSPW Ver. 17を用い、t検定を用いた。

IV. 結果

1. アンケート対象の基本属性

アンケート対象の基本属性を図1に示した。

役職・担当クラスの割合は、園長6.5%、主任8.7%、3歳児担当27.2%、4歳児担当23.9%、5歳児担当21.7%、フリー教諭12.0%である。3～5歳児の担当の割合は、大きな差がない。

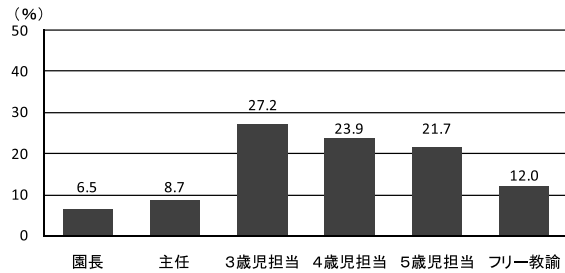


図1 役職・担当クラス

2. 保育における外遊びの重要度

保育における外遊びの重要度についての調査結果を図2に示した。

最頻値は、「非常に重要と思う (85.9%)」である。保育において外遊びを、「非常に重要に思う」と「重要に思う」を合わせると100.0%であり、幼稚園教諭の全員が外遊びが重要であると思っていることが分かる。

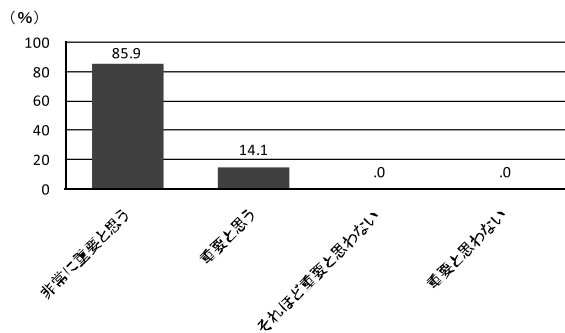


図2 保育における外遊びの重要度

3. 保育活動の重要度の順位

保育活動の重要度の順位の調査結果を図3に示した。

保育活動の重要度の順位で1番にあげているもののパーセンテージは、保育室の自由な遊び9.8%、保育室の音楽・造形活動7.6%、保育室の運動活動1.1%、保育室の絵本・話し合い活動6.5%、戸外の自由な遊び53.3%、戸外の運動活動7.6%、戸外の設定活動0.0%、散歩など0.0%である。

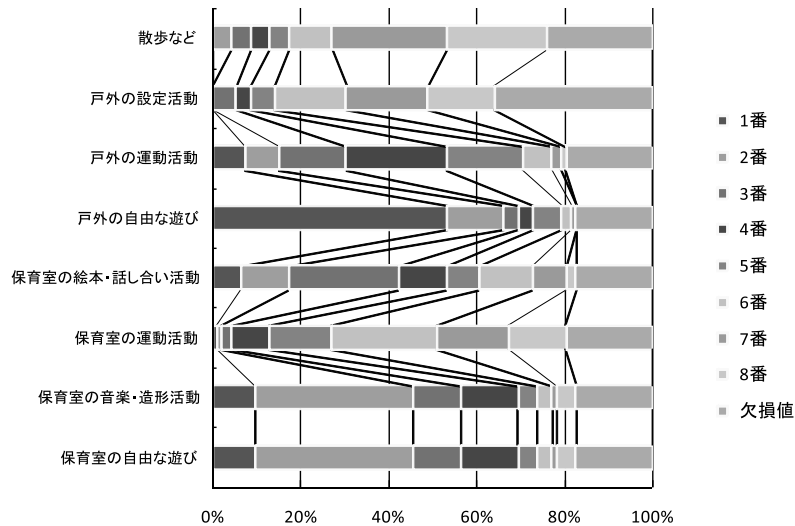


図3 保育活動の重要度の順位

2番目までの累積パーセンテージは、保育室の自由な遊び45.7%、保育室の音楽・造形活動15.2%、保育室の運動活動2.2%、保育室の絵本・話し合い活動17.4%、戸外の自由な遊び66.3%、戸外の運動活動15.2%、戸外の設定活動0.0%、散歩など4.3%である。

欠損値が、各項目17%以上見られる。

4. 外遊びに関する意識について

(1) 基礎体力

外遊びが基礎体力を身につけるために必要かどうかの調査結果を図4に示した。

最頻値は、「非常にそう思う (66.3%)」である。「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせると97.8%でほとんどの幼稚園教諭が、外遊びが基礎体力をつけるために必要であると思っていることが分かる。

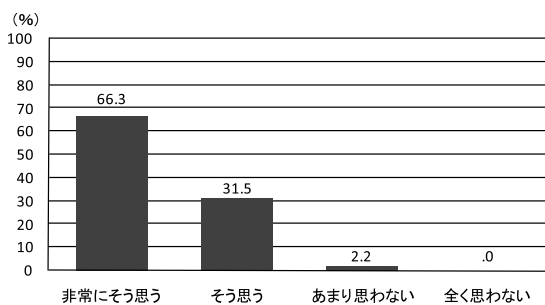


図4 基礎体力を身につける

(2) 自然に触れ、五感を刺激

外遊びが自然と触れ、五感を刺激して遊ぶために必要かどうかの調査結果を図5に示した。

最頻値は、「非常にそう思う (90.2%)」である。「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせると100.0%であり、全員の幼稚園教諭が、外遊びが自然と触れ、五感を刺激して遊ぶために必要であると思っていることが分かる。

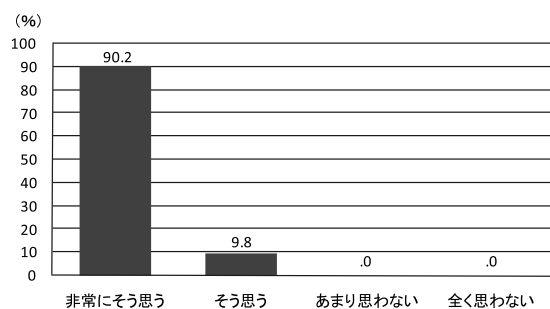


図5 自然と触れ、五感を刺激

(3) 気持ちの解放

外遊びが気持ちを解放して遊ぶために必要かどうかの調査結果を図6に示した。

最頻値は、「非常にそう思う (79.3%)」である。「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせると98.9%であり、ほとんどの幼稚園教諭が、外遊びが

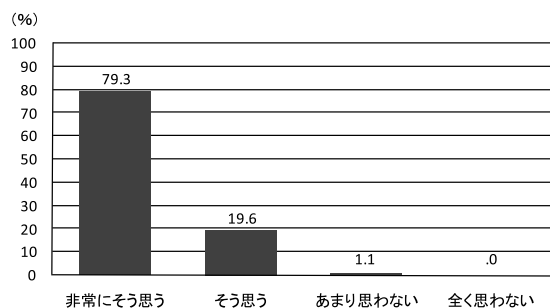


図6 気持ちの解放

気持ちを解放して遊ぶために必要であると思っ
てい
ることが分かる。

(4) 社会性

外遊びが友だちと遊ぶなどの社会性を身につける
ために必要かどうかの調査結果を図7に示した。

最頻値は、「非常にそう思う (67.4%)」である。
「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせると
100%で、全員の幼稚園教諭が外遊びが、社会性を
身につけるために必要であると思っていることが分
かる。

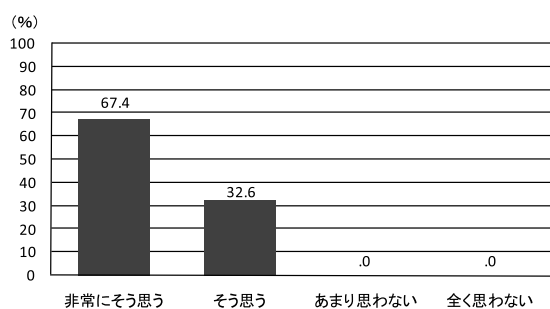


図7 社会性を身につける

(5) 美的感覚

外遊びが美的感覚を身につけるために必要かど
うかの調査結果を図8に示した。

最頻値は、「そう思う (56.0%)」である。「非常
にそう思う」25.3%、「そう思う」56.0%、「あまり
思わない」18.7%、「全く思わない」0.0%である。

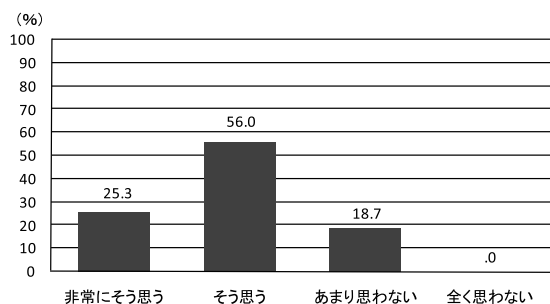


図8 美的感覚を身につける

(6) 規則正しい生活

外遊びが規則正しい生活を身につけるために必要
かどうかの調査結果を図9に示した。

最頻値は、「そう思う (59.3%)」である。「非常
にそう思う」28.6%、「そう思う」59.3%、「あまり
思わない」12.1%、「全く思わない」0.0%である。

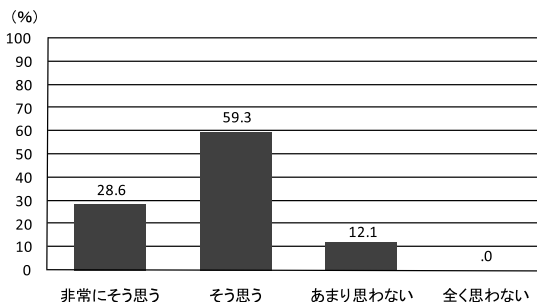


図9 規則正しい生活を身につける

(7) 身体を動かすように働きかけ

外遊びの時、子どもが身体を動かすように働きか
けているかどうかの調査結果を図10に示した。

最頻値は、「している (65.2%)」である。「非常
にしている」13.0%、「している」65.2%、「あまり
していない」21.7%、「全くしていない」0.0%で
ある。

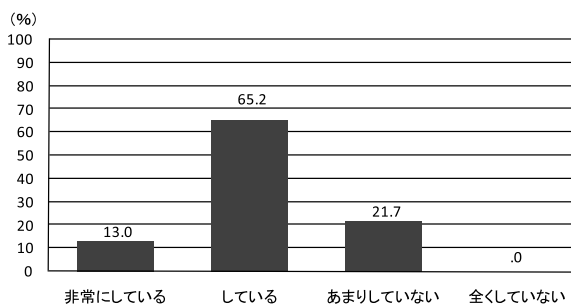


図10 身体を動かすように働きかけ

(8) 子どもと一緒に身体を動かす

外遊びの時、子どもと一緒に身体を動かして遊ぶ
ように心がけているかどうかの調査結果を図11に示
した。

最頻値は、「している (68.5%)」である。「非常
にしている」28.3%、「している」68.5%、「あまり
していない」3.3%、「全くしていない」0.0%で
ある。

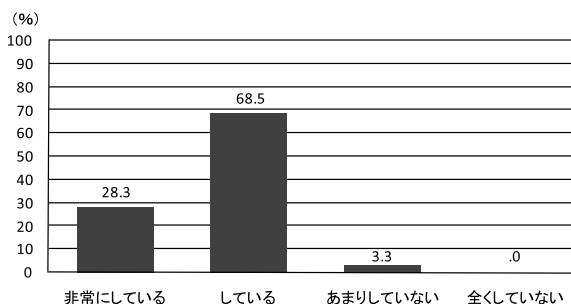


図11 子どもと一緒に身体を動かす

(9) 子どもの発見に共感

外遊びの時、子どもの発見に共感するように心がけているかどうかの調査結果を図12に示した。

最頻値は、「非常にしている (64.1%)」である。「非常にしている」と「している」を合わせると100.0パーセントで、全員の幼稚園教諭が子どもの発見に共感していることが分かる。

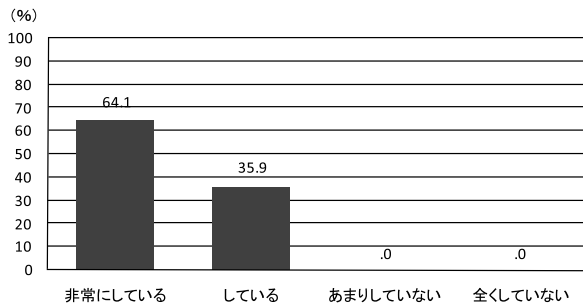


図12 子どもの発見に共感

5. 外遊びの日数

幼稚園の保育で、一週間のうち何日外遊びをしているかについて、3歳児は図13、4歳児は図14、5歳児は図15に示した。

3歳児の最頻値は、「5日から6日 (90.2%)」である。3歳児の1週間の外遊び日数は、「5日から6日」が90.2%、「3日から4日」が9.8%である。

4歳児の最頻値は、「5日から6日 (96.1%)」である。4歳児の1週間の外遊び日数は、「5日から

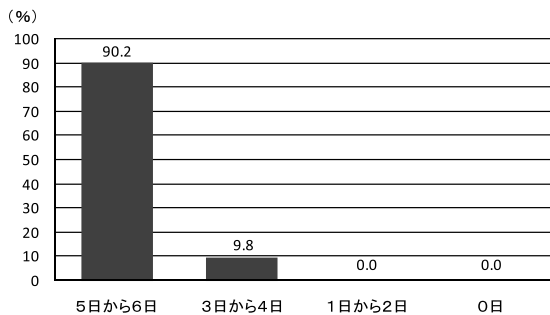


図13 1週間の外遊びの日数 (3歳児 N=51)

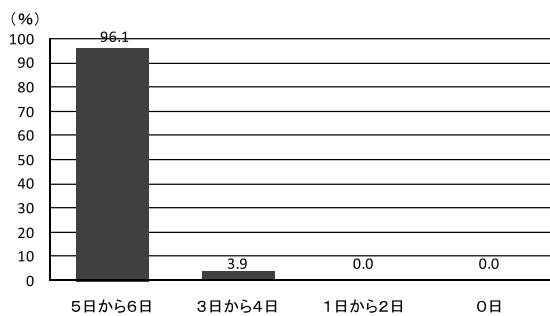


図14 1週間の外遊びの日数 (4歳児 N=51)

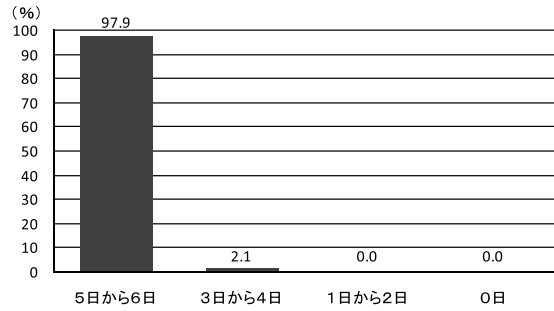


図15 1週間の外遊びの日数 (5歳児 N=49)

6日」が96.1%、「3日から4日」が3.9%である。

5歳児の最頻値は、「5日から6日 (97.9%)」である。5歳児の1週間の外遊び日数は、「5日から6日」が97.9%、「3日から4日」が2.1%である。

6. 1日の外遊びの時間

幼稚園の保育で1日の外遊び時間を、3歳児は図16、4歳児は図17、5歳児は図18に示した。

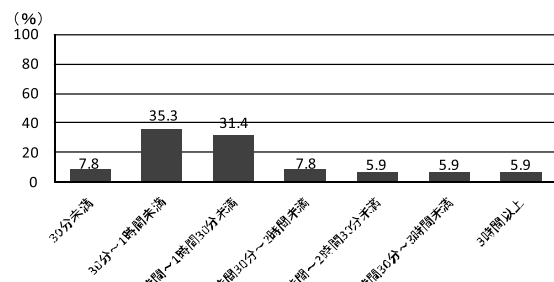


図16 外遊びの時間 (3歳児)

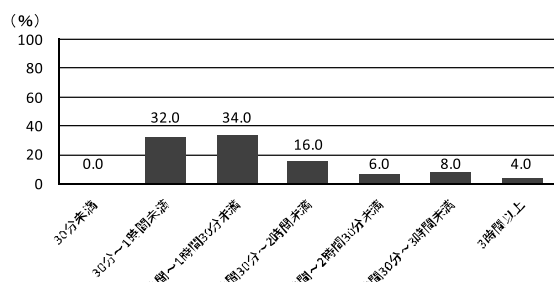


図17 外遊びの時間 (4歳児)

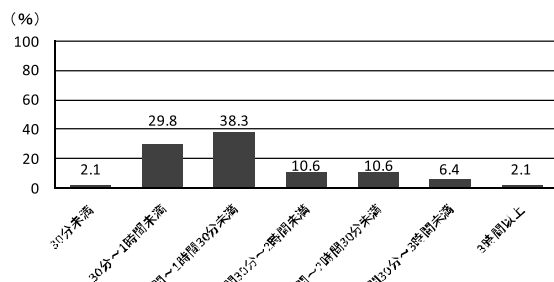


図18 外遊びの時間 (5歳児)

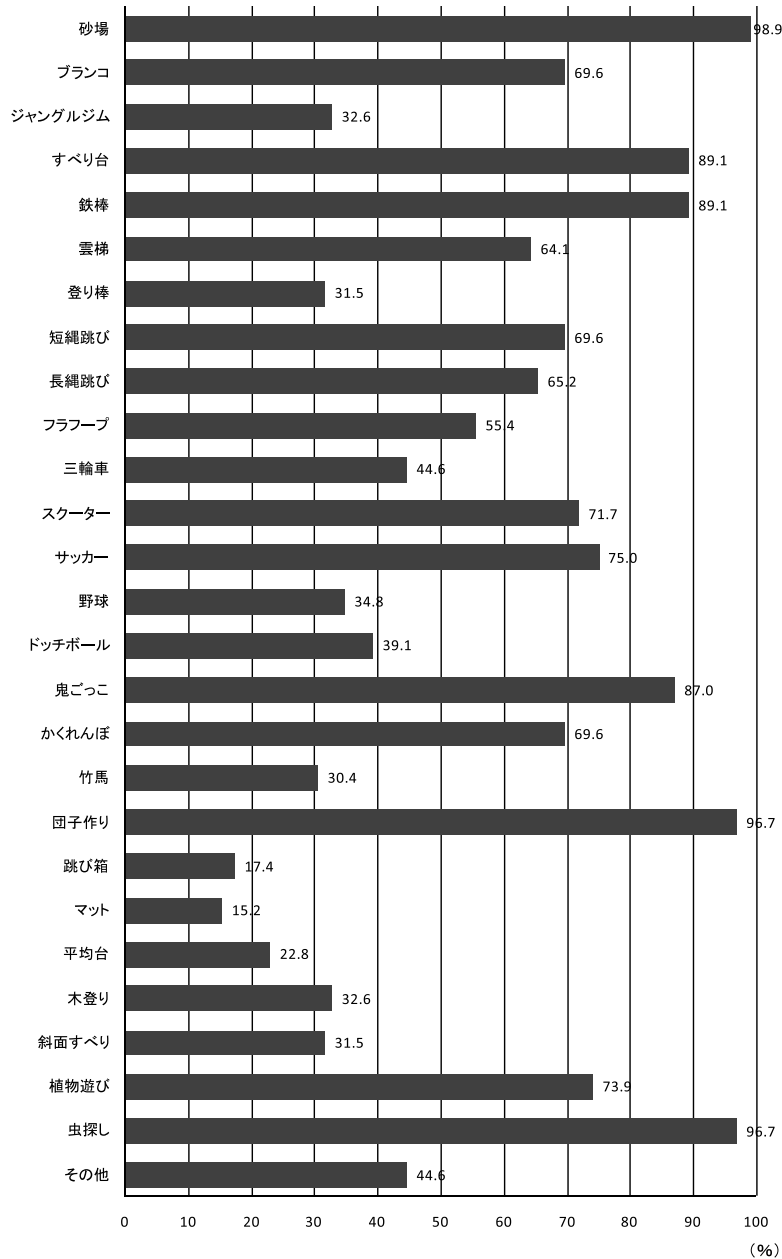


図19 幼稚園の外遊びの内容

3歳児の最頻値は、「30分～1時間未満 (35.3%)」である。

4歳児の最頻値は、「1時間～1時間30分未満 (34.0%)」である。

5歳児の最頻値は、「1時間～1時間30分未満 (38.3%)」である。

7. 外遊びの内容

幼稚園の外遊びの内容を、図19に示した。

幼稚園の外遊びで遊んでいる50%以上の遊びは、砂場、ブランコ、滑り台、鉄棒、雲梯、短縄跳び、長縄跳び、フラフープ、スクーター、サッカー、鬼ごっこ、かくれんぼ、団子作り、植物遊び、虫探し

であった。

8. 保育者の意識と外遊びの時間の関係

保育内容の重要度で、戸外遊びを1番に挙げた幼稚園教諭と2番以降に挙げた教諭の2群に分け、外遊びの時間を点数化したものを表1に示した。

表1 保育内容の重要度と外遊びの時間の関係

		戸外遊びの重要度	N	\bar{X}	SD
3歳児	1番		27	3.15	1.748
	2番以降		11	2.55	0.820
4歳児	1番		29	3.59	1.615
	2番以降		12	2.67	0.651
5歳児	1番		23	3.57	1.472
	2番以降		14	2.57	1.016

各年齢ごとにt検定を行ったところ、3歳児は有意な差は見られなかった($p=n.s.$)が、4、5歳児に関しては有意な差が見られた(4歳児 $p<0.05$ 、5歳児 $p<0.05$)。

この結果と平均値を見ると、4、5歳児担当の幼稚園教諭で、保育の中で戸外遊びが一番重要と思っている幼稚園教諭は、それ以外の幼稚園教諭よりも外遊び時間が長いと解釈できる。

V. 考 察

10園の調査結果から、幼稚園教諭の外遊びに対する意識と幼稚園の外遊びの実態の傾向が明確になってきた。

1. 外遊びに関する意識

ほとんどの幼稚園教諭が保育において外遊びは重要であると感じている。そして、外遊びをすることにより基礎体力がつくこと、自然と触れ五感を刺激すること、気持ちを解放する、社会性を身につける等の要素があることも意識している。

しかし、規則正しい生活を身につけるでは、基礎体力がつくこと、自然と触れ五感を刺激すること、気持ちを解放する、社会性を身につけると度数分布が違っている。「あまり思わない」を選択した幼稚園教諭が12.1%いた。生活リズムに関係する自律神経、ホルモンの分泌等、幼児が外遊びをしている時に外から受ける影響については認識が薄いと推察できる。

保育活動の重要度の順位で、欠損値が各項目17%以上見られたのは、保育活動には順位がつけられない理由で空欄になっていたり、すべての項目に1番をつけている等の保育観の差異があると考えられる。

2. 外遊びの日数/週・時間/日

外遊びの重要性は意識しているのであるが、実際の外遊びの1週間のうちの日数、1日の時間をみるとばらつきがある。1週間のうち「3日から4日」の外遊び日数が、3歳児9.8%、4歳児3.9%、5歳児で2.1%あり、1日の外遊び時間が「30分未満」が3歳児7.8%、4歳児0.0%、5歳児2.1%あった。筆者の24年間の幼稚園教諭としての経験値からすると考えられないことである。「30分未満」では、外に出て遊びこむことはできないと考える。時間的な

ことから考えても運動量は非常に少ないと推察できる。つまり、外遊びの重要であると意識はしているが、実態がともなっていないのである。

このように外遊びの日数、時間が少ないクラスがあることは事実である。このクラスの幼稚園教諭がなぜ外遊びの時間が少ないのか原因を追究し、改善していくことが急務だと考える。

3. 外遊びの内容

外遊びの内容の調査は、体育科学センターの体育カリキュラム作成小委員会が実施したもの(石河ら、1980)がある。幼稚園の自由遊び中に観察された活動と今回の調査を比較してみると(1980年の遊びを基準にした調査項目を作成しておらず、また、遊びは時代とともに変容するものなので単純に比較はできないが)、1980年は50%以上実施されている遊びで、今回の調査で50%未満になったものは、ジャングルジム、マット、平均台、たいこ橋であった。逆に、1980年に見られなかった遊びで今回の調査で50%以上みられた遊びは、雲梯、スクーター乗り、サッカー、団子づくり、植物遊び、虫探しであった。この結果から推察できることは、幼稚園の園庭の環境の変化が考えられる。たいこ橋がなくなり雲梯になり、ジャングルジムは設置している園が少なくなっている。植物遊び、虫探しは1980年の調査では活動として挙げられていないが、今回の調査では植物遊び73.9%、虫探し96.7%で、動植物に関連した遊びが多くみられる。その原因は社会環境の変化が大きいと考えられる。

4. 保育者の意識と外遊びの時間の関係

保育内容の重要度の意識と外遊びの時間の関係で、4歳児、5歳児で有意な差がみられた。つまり、幼稚園教諭の保育内容における外遊びの重要度の認識を高めることで、外遊び時間が長くなる傾向にある。幼稚園教諭の保育における外遊びの重要性のエビデンスを提示し具体的に啓発していく必要性を再確認した。

5. 本調査の自由記述から

本調査の自由記述をみると、保育における外遊びの重要性を痛感しているもの(外遊びでみられる子どもを社会を幼稚園から地域社会へ、外遊びにおける子ども同士の関わり・集団でのごっこ遊びの大切

さ、心と体の成長に欠かせない等)、また、体力・運動能力の測定基準、判定基準について、運動能力の低下している部分を補う具体的な遊び等の質問がみられ幼稚園教諭自身が今の子どもの置かれている現状を何とかしなければいけないという願い・思いを感じることができた。

一方、外遊びの重要性は十分理解できるが、光化学スモッグ、紫外線等の子どもの体に及ぼす影響があり心配であるとの意見もみられた。

「紫外線の浴びすぎによる、日焼け、しわ、シミ、良性、悪性の腫瘍や白内障等の健康の影響」、「オゾン層破壊による紫外線増加」等の健康問題、環境問題としての報道、情報を受けて、幼稚園でも紫外線に対する意識が高まってきているように感じる。

子どもの紫外線対策は、太陽紫外線について、そして、その有害性についてしっかりと理解し、教育者、保護者が対応しなければならない(市橋、2007)。また、その一方で、太陽紫外線の有用性も理解する必要がある。例えば、ビタミンDは、自分の体の中で合成することができ、合成される場所は皮膚であり、合成には紫外線の助けが必要となる(環境省、2008)。ビタミンDの主な働きはカルシウム代謝の調整であり、幼児の発育に関しては骨を形成する過程で大きな役割をはたす。また、ビタミンDは免疫能力を高めるといわれている。

日本では乳幼児の紫外線対策に関しては、母子健康手帳から「日光浴」の表現が「外気浴」に変わったこと(1998年から変更)、2005年環境省から「紫外線対策マニュアル」が発刊され(2008年6月改訂)、気象庁から「紫外線インデックス」が情報としてある。しかし、保育現場には、情報は十分に伝わっているとは思えない。

保育現場での紫外線対策としては、まず、保育者が、紫外線に対する正しい情報を得て、太陽紫外線の有用性と有害性の両方の健康影響についての最新の知識を持つことが大切である。そして、太陽紫外線の影響は個人差があるので(環境省、2008、母の友、1998)、子ども一人ひとりに応じた対応が必要である。

乳幼児に太陽紫外線の健康面でのリスクがあるならば、厚生労働省、文部科学省が戸外遊びやプール遊びのなどに何らかの方策を講じてくるはずである。過剰反応をして保育室に閉じこもって戸外で遊ばないことは、不健康であると考えられる。

このようなことから、幼児の健康な生活のためには、太陽紫外線に対して必要以上に恐れずに、対策をしっかりと、戸外遊びをすることが大切だと考える。

筋力低下を意識しており、鉄棒、雲梯の活動を意識的に取り入れているとの記述もあったが、鉄棒、雲梯の遊びは筋力をアップするというよりバランスの問題、調整力の問題で、あまり筋力アップにはつながらない。幼児期には筋力を鍛えるより調整力を高める方が大切なのである。結果的には望ましい遊びの提示ではあったが、基本動作、運動能力の基礎的な知識を幼稚園教諭が持つことが、幼児へ遊びを促す時の指針になると考える。

VI. 要約

幼稚園における外遊びの実態と幼稚園教諭の外遊びの意識について論究した。

本研究は、幼稚園の外遊びの実態、幼稚園教諭の外遊びの意識を把握することを目的とし、京都府、大阪府、兵庫県、広島県の私立幼稚園10園の保育者100名を対象に、幼稚園の外遊びの実態と保育者の意識に関する内容の外遊びに関する質問紙調査を実施した。回答にあたっては無記名で、回答の得られた92票(回収率92.0%)を分析の対象とした。

その結果、ほとんどの幼稚園教諭が保育において外遊びは重要であると感じていること、外遊びをすることにより基礎体力がつく、自然と触れ五感を刺激する、気持ちを解放する、社会性を身につけるなどの要素があることも意識していることが明らかになった。しかし、規則正しい生活を身につけるでは、「あまり思わない」を選択した幼稚園教諭が12.1%いた。自律神経、ホルモン等、幼児が外遊びをしている時に外から受ける影響については認識が薄いと推察できた。保育活動の重要度の順位で、欠損値が各項目17%以上見られたのは、保育活動には順位がつけられない理由で空欄、すべての項目に1番をつけている等の保育観の差異によるものであると考えられた。外遊びの重要性は意識しているのが、実際の外遊びの1週間のうちの日数、1日の時間をみるとばらつきがあった。外遊びの日数、時間が少ないクラスがあることは事実であり、このクラスの幼稚園教諭がなぜ外遊びの時間が少ないのか原因を追及し、改善していくことが急務だと示唆した。遊び内容は、時代と共に変容している遊びと変

容していない遊びがあり、それらは、物的、社会的な影響が大きいと考えた。

保育内容の重要度の意識と外遊びの時間の関係で、4歳児、5歳児で有意な差がみられ、幼稚園教諭の保育内容における外遊びの重要度の認識を高めることで、外遊び時間が長くなる傾向にあった。幼稚園教諭の保育における外遊びの重要性を啓発していく必要性を再確認した。

アンケートの自由記述をみると、保育における外遊びの重要性を痛感しているもの、体力・運動能力の測定基準、判定基準について、運動能力の低下している部分を補う具体的な遊び等の質問がみられ幼稚園教諭自身が今の子どもの置かれている現状を何とかしなければいけないという願い・思いを感じることができた。一方、外遊びの重要性は十分理解できるが、光化学スモッグ、紫外線等の子どもの体に及ぼす影響があり、心配であるとの意見もみられた。そこで、紫外線に関することにも言及した。以上のようなことから、基本動作、運動能力の基礎的な知識、紫外線等の環境に関する知識を幼稚園教諭が持つことが、幼児へ外遊びを促す時の指針の一つになることを示唆した。

引用・参考文献

- 青木潤一郎 2004 体力って、必要なの？ 体育科教育 10：20-23
 調枝孝治 1985 幼稚園と運動保育 体育の科学 Vol. 35 (1)：5-9
 母の友 1998 太陽が怖い!? —紫外線の話— 母の友 543
 市橋正光 2007 子どもの紫外線対策 小児科臨床 Vol. 60：1269(47)-1285(63)
 猪飼道夫 1967 体育生理学序説 杏林書院
 ——— 1969 運動生理学入門 杏林書院

- 石河利寛他 1980 幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究 I. カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について 体育科学 8：150-155
 環境省 2008 紫外線環境保健マニュアル 2008 環境省環境保健部環境安全課
 小林寛道 1985 幼児の身体活動と運動 体育の科学 Vol. 35(1)：10-14
 ——— 1989 子どもの体力をどうとらえるか 体育の科学 Vol. 39(11)：830-833
 ———他著 1990 幼児の発達運動学 ミネルヴァ書房
 ——— 2008 子どもにとってなぜ運動は必要か 体育の科学 Vol. 58(5)：330-304
 近藤充夫 1981 子どもの運動遊びのみなおしを 体育の科学
 ——— 1990 新版乳幼児の運動遊び 建帛社
 文部科学省 2008 幼稚園教育要領平成20年告示 文部科学省
 ——— 中央教育審議会 2002 子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申) 文部科学省
 ——— 中央教育審議会 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申) 文部科学省
 ——— 2006 平成17年度体力・運動能力調査報告書「平成17年度体力・運動能力調査」の概要 文部科学省
 ——— 2008 平成19年度体力・運動能力調査報告書「平成19年度体力・運動能力調査」の概要 文部科学省
 ——— スポーツ・青少年局生涯スポーツ課 2009 平成20年度全国体力・運動能力、生活習慣調査結果について 文部科学省
 文部省体育局 1998 平成9年度体力・運動能力調査報告書 文部省
 中村和彦 1999 子どもの遊びの変貌 体育の科学 Vol. 49(1)：25-27
 ———・植屋清見・坂下昇次・稲葉淳・宮丸凱史・浅川和美・秋山由里 2000 子どもの遊びの変遷と今日的課題 日本体育学会第51回大会号：321
 杉原隆 2008 運動発達を阻害する運動指導 幼児の教育 107(2)：16-22